

東日本大震災の発生から10年を迎えた昨年、130名の社員が現地に足を運んで、現状と人々の思いを直接取材。被災地の今をレポート。

TOHOKU VOICE

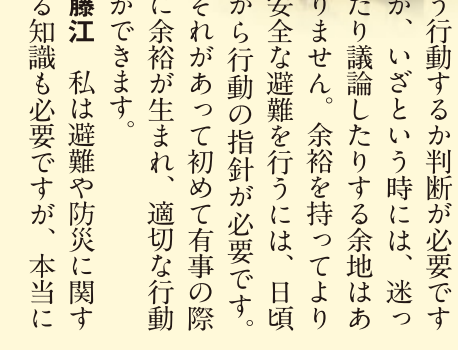
相日防災
そうじつぼうさい
東北視察全社員統一プロジェクト



気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館。高校校舎の4階に流れ着いた自動車が残る



津波で全壊した松原の中のユニースホテル。陸前高田市



震災伝承施設の中でも多くの資料や被災物が展示されているいわてTSUNAMIメモリアル

3月11日、未曾有の被害をもたらした東日本大震災から11年の歳月が経とうとしている。被災地は復興の兆しを見せるが、人々の心には失われた命と街や暮らしが大きな傷跡を残す。災害の記憶を風化させないように、相日防災では10年の節目を機に1年にわたり、全社員が4〜5人ずつに分かれ、被災地の視察を行った。現地でのリアルな声をどう生かすか、防災・減災の観点で各地を訪れた社員が思いを語った。

VOICE 01 躊躇していた気持ちを乗り越え被災地へ

TOHOKU VOICEの取り組みを、どう思いましたか。

小松 節目として10年が経過しても、復興は終わっていない被災地の今を伝えなければいけません。

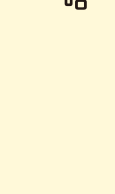
藤江 私は幼い子どもがいるので、これまでは被災地に行きませんでした。ホームページに社員が取材した写真や文章を載せる仕事をしていたので、自分でも写真を撮って伝えたいという気持ちが強まりました。現地へ足を運び、自分の目で確かめることの大切さを実感しました。

秋山 私も初めて被災地を訪れましたが、行けば必ず勉強になると思っていました。コロナ禍で現地へ入れられず、不安で「また来てね」と優しい言葉をかけてくださいました。

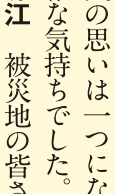
興津 被災地の映像を見たり、被災された方にお会いしたりするのは心苦しく、これまでは躊躇していましたが、今回はいい機会でもあり、初めて足を運びました。



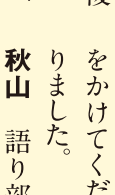
興津英昭
厚木支店



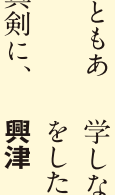
厚木支店



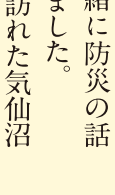
厚木支店



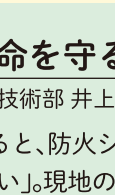
厚木支店



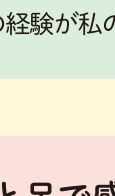
厚木支店



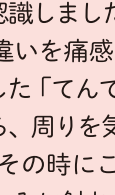
厚木支店



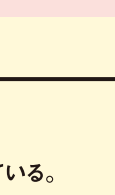
厚木支店



厚木支店



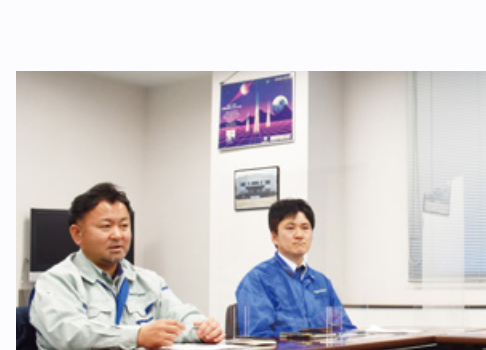
厚木支店



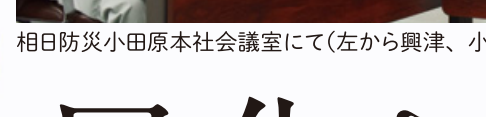
厚木支店



石巻市震災遺構大川小学校。多くの児童が犠牲になったその傷跡は深い



相日防災小田原本社会議室にて(左から興津、小松、藤江、秋山)



厚木支店



厚木支店



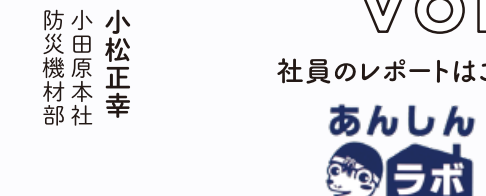
厚木支店



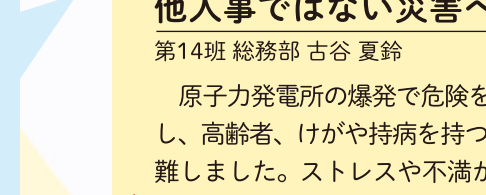
厚木支店



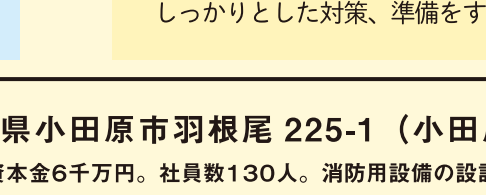
厚木支店



厚木支店



厚木支店



厚木支店

巻市の大川小学校などの震災遺構を視察しました。秋山 陸前高田市の奇跡の一本松を遠くから見ました。多くの児童が犠牲となった大川小学校では、私たちが着いたとき、校門前でお坊さんの誂経が始まっていた。現地の人々の思いは風化していないことをひしひしと感じました。

藤江 幼い子どもを持つ身として、学校や幼稚園の被災の話には「耐えられるかな」という不安と、行くからにはしっかりと学ばなければという気持ちが複雑に交錯しました。

秋山 語り部さんは真剣に、涙ながらに当時の様子を伝え、中には気持ちが沈んだままの方もおられるそうです。だからこそ被災地の記憶は大

切に伝えなければならないと思います。被災地に行かなければわからないこともありますね。藤江 「うちの5歳の子どもには、避難経路の階段を登れるだろうか」とか、自分自身に重ねて考えてしまいます。子どもが大きくなって、東北に連れて行って、いろいろ見学しながら、一緒に防災の話をしたと思います。

興津 私たちが訪れた気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館は、被災した水産高校の校舎で、津波に飲み込まれた自動車も、今もその4階に残っています。ここでは体育の先生だった方が説明してくださいました。防災士の資格も取ったそうです。

小松 いろいろな施設がありますが、公開している情報もそれぞれに特色がありますね。

秋山 防災用品の開発や提案を通して、防災・減災につながり、有事には頼りにされる。地域の皆さまに伝えていくことが大切です。一人でも多くの命が助かれば、これ以上のことはありません。被災された方からお聞きした言葉は大きな意味がありました。

小松 私は5年前にも東北を訪れ、熊本や北海道胆振東部地震では炊き出しを行い、震災直後の被災地を見てきました。そのたびに感じるのは、報道や想像にとらわれず、自分が見たもの聞いたものを正確に伝えることが大切だということです。10年経って初めて、震災のことを話すという人もいらついています。被災地に足を運び続けることは、私たちの使命です。

VOICE 02 想像以上に強かった被災地の伝えたい思い

現地に抱いていたイメージとのギャップがありましたか。

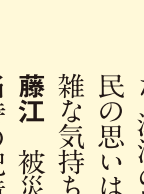
興津 最初に行った田老町の印象が強いですが、建設中の防潮堤の高さに驚きました。防潮堤は途中で切れている部分があったのですが、宿泊先の女将さんに尋ねると「海が見えなくなる」との意見をお持ちでした。津波の被害を受けても、住民の思いは一つにならない。複雑な気持ちでした。

藤江 被災地の皆さんからは、当時の記憶を伝えたいという思いが想像以上に強く感じられました。偶然、居合わせた人が「お話ししましょうか」と声をかけてくださったこともありました。

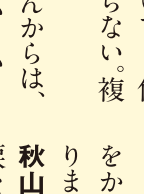
秋山 語り部さんは真剣に、涙ながらに当時の様子を伝え、中には気持ちが沈んだままの方もおられるそうです。だからこそ被災地の記憶は大

切に伝えなければならないと思います。被災地に行かなければわからないこともありますね。藤江 「うちの5歳の子どもには、避難経路の階段を登れるだろうか」とか、自分自身に重ねて考えてしまいます。子どもが大きくなって、東北に連れて行って、いろいろ見学しながら、一緒に防災の話をしたと思います。

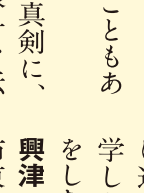
興津 私たちが訪れた気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館は、被災した水産高校の校舎で、津波に飲み込まれた自動車も、今もその4階に残っています。ここでは体育の先生だった方が説明してくださいました。防災士の資格も取ったそうです。



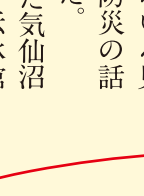
厚木支店



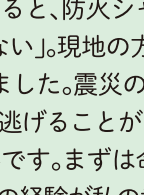
厚木支店



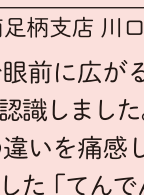
厚木支店



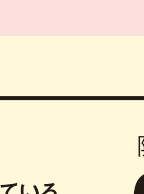
厚木支店



厚木支店



厚木支店



厚木支店

VOICE 03 思い込みにとらわれない的確な判断を

人命を守るには何が一番大切ですか。

小松 マニュアルだと思いが、災害時は必ず勉強になると思っていました。コロナ禍で現地へ入れられず、不安で「また来てね」と優しい言葉をかけてくださいました。

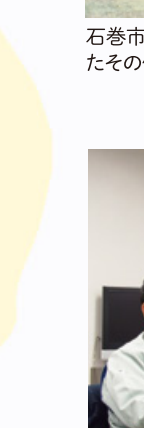
興津 被災地の映像を見たり、被災された方にお会いしたりするのは心苦しく、これまでは躊躇していましたが、今回はいい機会でもあり、初めて足を運びました。

秋山 私も初めて被災地を訪れましたが、行けば必ず勉強になると思っていました。コロナ禍で現地へ入れられず、不安で「また来てね」と優しい言葉をかけてくださいました。

藤江 被災地の映像を見たり、被災された方にお会いしたりするのは心苦しく、これまでは躊躇していましたが、今回はいい機会でもあり、初めて足を運びました。

秋山 語り部さんは真剣に、涙ながらに当時の様子を伝え、中には気持ちが沈んだままの方もおられるそうです。だからこそ被災地の記憶は大

切に伝えなければならないと思います。被災地に行かなければわからないこともありますね。藤江 「うちの5歳の子どもには、避難経路の階段を登れるだろうか」とか、自分自身に重ねて考えてしまいます。子どもが大きくなって、東北に連れて行って、いろいろ見学しながら、一緒に防災の話をしたと思います。



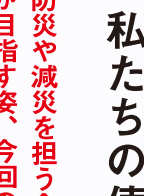
厚木支店



厚木支店



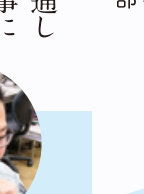
厚木支店



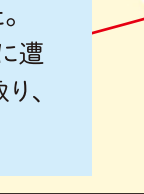
厚木支店



厚木支店



厚木支店



厚木支店

風化させない3.11の記憶

東日本大震災から11年

VOICE 04 被災地に足を運ぶことも私たちの使命

防災や減災を担う企業として、会社が目指す姿、今回の経験を踏まえて皆さんの仕事に生かしたいことはありますか。

藤江 語り部さんが「被災の体験話を聞いて、被災の疑似体験を重ねることは防災訓練と同じ効果がある」と、おっしゃっていました。これまでは災害を「知る」「学ぶ」に重きを置いていましたが、防災のプロとして、悲しい事実を繰り返さないように、その情報の発信にもっと力を入れたと思います。

興津 私は今、防災士の資格取得を目指しています。日々、防災について学び、新しい情報を取り入れ、被害を最小限にするにはどうすればいいかを考え、お客さまがより確かな準備ができるようにお手伝いしたいと考えています。

秋山 防災用品の開発や提案を通して、防災・減災につながり、有事には頼りにされる。地域の皆さまに伝えていくことが大切です。一人でも多くの命が助かれば、これ以上のことはありません。被災された方からお聞きした言葉は大きな意味がありました。



松原の中にたった1本だけ残されていた奇跡のクロマツ

現地の声届けます

TOHOKU VOICE

社員のレポートはこちらのサイトで

あんしんラボ Anshin-labo

QRコード

小松正幸 小田原本社 防災機材部

古谷夏鈴 第14班 総務部

井上隼希 第21班 小田原本社 保全技術部

川口恵美 第16班 南足柄支店

小澤善幸 第8班 横浜本店

小松正幸 小田原本社 防災機材部

古谷夏鈴 第14班 総務部

井上隼希 第21班 小田原本社 保全技術部

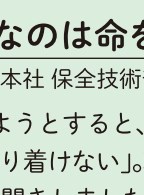
川口恵美 第16班 南足柄支店

一番大切なのは命を守ること

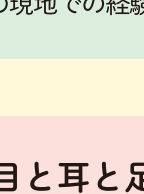
「いざ逃げようとする、防火シャッターや防火戸が作動し、荷物や壁が崩れて非常口にたどり着けない」。現地の方から「災害時の避難は訓練通りにはいかない」という話をお聞きしました。震災の経験があるからこそその説得力のある言葉でした。有事の際は素早く逃げるのがどんなに大切か。防災の知識や備えも大切ですが、体力はさらに必要です。まずは命を守ること、胸に刻んでおかなければなりません。今回の現地での経験が私の考えを変えてくれました。

目と耳と足で感じる震災復興

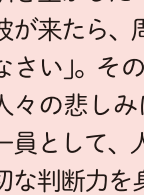
現地で眼前に広がる平野を眺め、あらためて震災の大きさを認識しました。メディアを通した想像とリアルな情報の違いを痛感しました。この地方には過去の教訓を生かした「てんでんこ」の言い伝えがあります。「津波が来たら、周りを気にせず、てんでんばらばらに逃げなさい」。その時にこの行動が取れるか自問しました。人々の悲しみに触れるのはつらいですが、防災会社の一員として、人のつながりを大切に、思いやりの心と適切な判断力を身に付けたいと感じました。



厚木支店



厚木支店



厚木支店

厚木支店